

中国語教育—一つの試み

Reflection on Educational Chinese

李 永寧

1. はじめに

“誤人子弟” wù rén zǐ dìという成語が中国にある。学問もないくせに無責任な教え方をして学生をだめにしてしまう、というような意味である。

教える、ということは、大変難しいことである。私の小学校5年から6年にかけての1年足らずではあるが、日本語教育では大変よい先生に恵まれた。今でも感謝している。その逆であったら、どうであったか。教える、ということは実に、怖いこと、だと思う。

私は、日本の大学で中国語を外国語として教えて、7年になる。専門課程と第二外国語として、である。試行錯誤も多くした。今思うと冷汗が出る。とくに、予習・復習を強調出来なかった第二外国語としての中国語教育は惨たんたるものであった。まさに、“ニガイ経験”であった。“外国語が苦手なので、中国語を選択しました。”という入試バテした大学生に文字通り、^アa^ベY^{ツェ}b^ウウ^セc^チウ^セ……と汉语拼音hàn yǔ pīn yīnから教えて行くのは大変だった。“難しい漢字の読み方もこうした中国式ローマ字をふればピンとわかる”などと苦心はしたものの、教わる側はすでに中国語アレルギー症になっており、授業にもつつい御無沙汰を続けた挙句、学期末に、単位を下さいなどと泣きつかれた。仕方なく、適当な入門書を指定してレポートを書かせ、“中国語は外国語であった”という認識を持ってくれたことで、青信号を出してパスさせたこともしばしばであった。情状酌量だとは言え、こうした処理には後味の悪さを残す。結局、何も教えてなかったのではないかと。

教室で、野球帽とも何ともつかない奇妙な帽子を、つばをうしろにして変な具合にかぶって授業を受けている学生がいる。“そこなる学生、ヘッドギアをはづせ、はづしても李尊師の教えはあたまに入るぞ!”と言っただけで、そうした学生の側にも非があるのではないかと思ったりする。“私語”などという大学生の授業中の勝手なおしゃべりは論外、もっての外だと思うが、東大というようなところでもまん延している、ときく。菓子類を食べたり、飲み物を口にする者もいる。そうした彼らには全く罪悪感がないようだ。日本には“三尺退いて師の影を踏まず。”という言い方がある。強いて中国に訳するなら、“忌踐師影、恭退三尺。”とでもする外ない。儒教の本場の中国にもないことわざを生んだ日本のでこんなことがあるとは、中国に居てはわからなかった。教授会でもいつも私語をしている若い教授・助教がいる。“私語”はトレンドtrendなものなのかも知れないが、私にはその行為は理解出来ない。いねむりとか眠入っている学生については、心の中では“安らかに眠れ!”と罵って大目に見ることもあるが、私語だけはどうしても我慢出来ない。私語は公害であり、サリンでもある。50人居る教室で2、3人に私語されると授業は全くぶちこわしである。苦心して準備したのにそれ以上授業を進めて行く気がなくなる。私語とは教師を侮辱する憎っくきもの、ゆゆしきものである。そのくせ、奇怪なのは、“試験”とか“単位”などについて説明すると、途端に静かになり、机にうつ伏せて居眠りしているものもちゃんと背筋を正して来る。そうした要領の良さには感心させられる。どうもわからなくなる。中国の大学では“要教书，也要教人。” yào jiāo shū, yě yào jiāo rén とよく言われているが、大学の教師に、教室では帽子をかぶるな、とか、居眠りするな、とか、私語をするな、ということと言わせなくてはならないとは、なさげない。

中国語教育、というのはとても大きなテーマである。しかし、日本の大学生に中国語を教えるという研究の歴史は浅いようである。その上、中国自身が、中国語に対する研究をまだそれほど進めているようには思えない。

こうした研究はどうしても十分な時間と手間をかけなくてはだめである。いわんや、私のごときに、中国語教育うんぬんなどと、なまいきなことを言うことなど、出来るわけではない。ここ7年、私はただ“中国語”という大きな“ゾウ”を意識して撫ぜたままでである。“中国語”という全体像に対する概念にとんちんかんな見方をしているかも知れない、しかし、あえて、私の中国語教育に対する考えを並べてみよう。それを私の“勇氣”ととっていただきたい。道生一、一生二、二生三、三……生万物。その……の一点でありたい。

2. なぜ中国語を学ぶのか

学期の始め、中国語を選択した学生に書かせる題である。そのうち一番“面白い”のが、“外国語が苦手だから”。その外に、“ジャッキー・チェン（成龍）と話してみたいから”とか、“将来の就職のため。一つでも多くの言葉が出来ると有利だから。”

手もとに同志社大学で教えている郭潔梅先生のアンケート調査がある。それによると、

一、学習の目的：

1. 異文化を理解したいから。
2. 中国での生活に順応するため、中国人との交流を深めたいから。
3. 独自の人格と世界観を形成したいから。

二、中国語を選択した理由：

1. 学びやすい、と思ったから。 57.3%
2. 中国の文化をもっと理解したいから。 29.8%
3. 何となく。 22.7%

である。

言語の人気はその国との政治・経済的要因と文化的要因が大きく関係する。中国語は1989年以来一時的に人気を落としたが、中国と日本との経済

協力が促進されるにつれて、その人気を急激に回復したようだ。

言語の人気上がるもう一つの要因は、“学びやすい言語であるかどうか”である。難易度の差は、発音・文字・文法上の問題など言語そのものが持つ特性からくるものである。そのうち、もっとも重要なのは“文化の違い”である。文化の違いが考え方、発想の違いを来たし、それが言語の形成に影響を与えている。それが外国語としての言語の難易度をきめる。

漢字文化を中国から学んだ日本人にとっては、中国語は習得しやすいことになる。とにかく、日本人にとって中国語は毛色の似ている英語など西欧語よりなじみやすい言語だ、とも言える。言語はコミュニケーションをとる上での最大の手段であり、言語を学ぶことは、その国を知り、異文化を理解することから始まる。“言語は文化”そのものである。こうしたことをよく説明してくれるのが上のアンケートの調査結果である。——“学びやすい、と思ったから。”、“何となく”中国語にひかれたから。しかし、この一面の外に他の一面がある。それは、中国語は日本人にとっては外国語である、という事実である。そういうハードルがあるからこそ努力して学ばなければならないのである。同じような“误会”が日本語を学ぼうとする中国人にもある。それで日本語を甘く見て選択した学生が、“笑着进去，哭着出来。”ということになる。日本語は中国人にとっては、外国語であり、努力してそのハードルを乗り越えなければならないのである。

古代漢語の音と意味を多くとどめている日本語の漢字と、北京語の音をもとにして形成されて変化して来た現代漢語の漢字とは発音も意味も違って来ているものが少なくない。したがって、同じ漢字に接しても、日本人と中国人との文化的感覚のギャップの大きさを感じさせられることがよくある。“暖簾”は日本語では“ノレン”と読むが、現代漢語では“nuǎnlián”と読む。“のれんに腕押し、柳に風。”という言い方があり、この“のれん”は、何かさらさらひらひらしているという感じを与えるのが、現代中国語では、何かずっしりしたものを感じさせる。零下二十度になることもある冬の北京の王府井の百貨大樓の入口に2メートルはある綿のぎっ

しりつまっている風よけの“nuǎnlián”は、体当たりしないと中に入れない。油っこい中華料理の宴会のあと、家に帰って、濃い緑茶にヨウカンでほっとした……なんて話しを聞いたことがあるが、漢字の“羊羹”の羹を見ると広州の名物料理、“蛇羹”を連想する。これは、“龍虎鬪”とも言い、龍に見立てたヘビとトラに見立てたネコ、それに鳳ほうに見立てたにわとりを一つのカマの中でゴトゴトクダクダ何時間も煮詰めたものである。“羊羹”とは羊のあつものの煮ごりである。あっさりとした菓子とのイメージからは程遠い。

中国語とは日本人にとって外国語である。腹を据えて努力して行かないと、中国語を学ぶ目的の初心を全う出来なくて、中国語アレルギー症になってしまう。

以下日中兩言語の相違についてふれてみよう。

3. 漢字について

同じ漢字を使っている、違う意味を持っているもの。()内は日本の漢字。

爱(愛)玩：这个孩子～／この子は遊ぶのが好きだ。爱(愛)人：她是我的～我是她的～／彼女は私の妻です。私は彼女の夫です。爱(愛)想：他总是～将来的事／彼はいつも将来のことを考えている。天晴：明天～／あしたは晴れです。有难(難)：有福同享，～同当／苦楽をともしにする。暗算：他们在～你／やつらは君を陥れようとたくらんでいる。嘘：把手～暖了／息を吹きかけて手を暖める。他仰天而～／彼は空を仰いでため息をつく。打：打水去／水を汲みに行く。馄饨(餛飩)：包～／ワンタンを作る。远虑(遠慮)：人无～，必有近忧／遠い将来のことを考えに入れておかないと目の前に必ず思いがけない憂いが起きるものだ。大方：他很～／彼は気前がよい。女将(將)／女性の有能者。

鬼子／中国を侵略した外国人に対する憎悪の言葉。“人”でなく“鬼”という罵り。特に日本人に対して使う。 外人： 今天没有～，都是自己人／今日は他人はない、全部身内だ。 觉（覚）悟： 現在已經～到学习的必要性了／今はもう学習の必要性に目ざめた。 假装：～不知道／知らんふりをする 下流话（話）：下品な言葉。 闻（聞）： 这是什么味？你～一下／何のにおいか、かいでみて 汽车（車）： 公共～／乗合バス 公家： 我是给（給）～办事／私は公の仕事をしている 工夫： 一会儿的～，天就变了／ちょっとの間に天気が変わった。 明天有～请再来玩／あしたひまがあればまた遊びに来てください。 她写诗（詩）的～很深／彼女の詩作に対する造詣は深い。 ～不负（負）有心人／努力をすれば必ずそのかいはある。 怪我： 这都～不好／なんと言ったって私が悪いのだ。 检（検）讨（討）： ～书（書）／始末書。 质（質）问（問）／詰問。逆子／不孝もの。 丈夫： 她有～／彼女は夫のいる身だ。 新闻（聞）： 今日～／今日のニュース。 大丈夫／立派な男。 机： 客～／旅客機。 手纸（紙）／トイレットペーパー。 东（東）西： 他买～去了／彼は買物に行きました。 东（東）洋： ～人／日本人。 祝词（詞）： 致～／祝辞を述べる。 暖帘（簾）／冬に風よけのため入口に掛ける綿入れの防寒おおい。 卖（売）女／娘を売ること。 走／あるく。 百姓／庶民。 便宜：这又～又好／これはやすくてよい。 勉强（強）： 他～地笑了一下／彼は仕方なくにと笑った。 我认为这个理由很～／この理由ではどうみても不十分だと思う。 麻雀／すずめ（広州語ではマージャン）。 娘／おっかさん。～家／実家。 汤（湯）／スープ。 床／ベッド。 理屈： 他觉（覚）得自己～就不作声了／彼は自分の理屈が通らないことに気がついて、だまってしまった。 料理： ～后事／死後の始末（葬式）をする。她在家～家务／彼女は家で家事をきりもりする。 老婆／女房。 大～／正妻。 小～／妾、愛人。 老爷（爺）／旦那様。 这位爷／そちらの旦那……などである。

日本の常用漢字表に記載された漢字は1945字である。一方、中国では19

86年、国家教育委員会中小学校教材審定委員会では、小学6年修了時で2522字が出来なければならないことになっている。そして1988年からの小学生の語文教科書はこの線にそって編さんされることになっている。

日本の国語教科書も同じだが、中国語の教科書も、小学校6年となれば相当な内容の文章が出てくる。日本語は漢字の外にひらがな、カタカナがあるので言語表記上大変有利である。中国国家教育委員会指定の小学6年修了必須の2522字が掌握されていれば、中国の新聞とか現代小説を読んだり日常の言語生活にはこと足りる。

日本の大学生に“2522字^{マイナス}-1945字”つまり577字習うことはさほど難しいことではないと思う。そしてそうした中国語を学ぼうという大学生に一年かけて中国の小学6年生が習うことになっている2522字という漢字の読み方、書き方、意味を熟知することは少しも難しいことではないと思う。

以下の中国語漢字は日本の常用漢字とは多少違うにしても、容易に推測のつく漢字だと思う。

爱(愛), 拜(拝), 辈(輩), 闭(閉), 边(辺), 变(変), 曾(曾), 长(長),
 车(車), 报(報), 诚(誠), 肠(腸), 岛(島), 陈(陳), 齿(齒), 处(処),
 窗(窓), 东(東), 动(動), 队(隊), 给(給), 贯(貫), 计(計), 坚(堅),
 检(檢), 紧(緊), 竞(競), 脸(臉), 马(馬), 鸣(鳴), 难(難), 农(農),
 钱(錢), 热(熱), 荣(榮), 伞(傘), 时(時), 实(實), 势(勢), 厅(庁),
 鸟(鳥), 污(汚), 戏(戲), 现(現), 县(県), 盐(塩), 娱(娛), 载(載) ……。

日本人にはちょっとわかりにくい漢字：

备(備), 笔(筆), 标(標), 补(補), 层(層), 产(産), 尝(嘗), 厂(廠),
 吵(吵), 彻(徹), 尘(塵), 惩(懲), 迟(遲), 础(礎), 传(伝), 创(創),
 导(導), 邓(鄧), 敌(敵), 读(讀), 买(買), 卖(売), 队(隊), 恶(惡),
 发(発), 奋(奮), 坟(墓), 丰(豊), 风(風), 妇(婦), 冈(岡), 网(網),
 广(広), 归(帰), 还(還), 汉(漢), 关(関), 华(華), 击(撃), 价(価),
 舰(艦), 杰(傑), 仅(僅), 尽(盡), 剧(劇), 开(開), 龙(龍), 灭(滅),
 宁(寧), 弃(棄), 迁(遷), 亲(親), 庆(慶), 让(讓), 认(認), 胜(勝),

圣(聖), 适(適), 书(書), 术(術), 孙(孫), 叹(嘆), 囡(囡), 伟(偉), 乡(鄉), 养(養), 业(業), 邮(郵), 远(遠), 种(種), 专(專), 药(藥), 乐(樂)……。 “叶” は “葉” のこと、よく “亲” を “妾” にしてしまう学生がいる。 “おや” を “妾” にしてしまうなんて、ひどい！今どきの若い人は。これを “逆子” と言う。

4. 発音について

漢字のふりがなとしては、やはり、“勺父冂冂”より汉语拼音hàn yǔ pīn yīnの方がよいと思う。たしかに、勺父冂冂方式は音韻的にしっかり整理されている。しかし、教わる側からしてみれば、なじみのない符号を憶えなければならない。すでに知っている英語のアルファベット26文字を使って表記出来る中国語のローマ字、“汉语拼音”を学ぶ方がよい。そのa b c…もㄚ、ㄗせ、ㄘせ……とやるよりも、a [ei]、b [bi:]、c [si:]と英語式にやったらよいと思う。そしてそれで音韻上意義のあるbō、pō、mō、fō……の分類を教えたらよいと思う。

発音訓習の際は単調さを破るため、bō(波) pō(坡) mō(摸) fō(佛)、
波大^{bō dà}のbō、坡小^{pō xiǎo}のpō、摸索^{mō suǒ}のmō、佛教^{fó jiào}のfō; 知zhī、吃chī、师shī、日rì。
知道^{zhī dào}のzhī、吃饭^{chī fàn}のchī、老师^{lǎo shī}のshī、日本^{rì běn}のrì……とよく使われることばと結びつけて教えたらよいと思う。fōとかrìの音に相当する漢字はないので佛fō、日rì、として教える。そして、発音の練習、汉语拼音hàn yǔ pīn yīnを教える段階で、先どりして中国語の実用的なセンテンスになれさせるのである。つまり、波大、波大吗？波大。你信佛吗？——我不信佛。你呢？——信。我吃饭。你呢？と繰り返し練習をして、教室の中で中国語での会話を多くし、単純に発音だけを教えるのではなく、発音と実際の漢字（つまり意味のあるword）と結びつけ、さらにそのwordを実際のセンテンスの中で掌握させ、実際に使えるような演習を多くさせるべきである。その際は必ず、“聞かせる→話させる→書かせる。”という順序でやる。

そして書かせたものを話させる、というくりかえしをする。言語というものは、聞く・話すが基本的なものだ。そして、“聞く”が最も大切で、言語で最も基本的なものである。われわれがmother language がうまいのは、母親のお中にいるうちからじっと“聞いている”からである。つまり、mother language に関しては、人間は、生れる前から勉強しているのである。聞くことが、言葉の一番基本なものなのである。

知zhī、吃chī、师shī、日rìのzhī、chī、shī、rìを含む“そり舌音”ほど日本の学生にとって難しい発音はない。“chī”を“qī”と発音の区別はとりわけ難しいようである。それで、“吃饱了”を“鸡饱了”にしよう。

“そり舌音”とは、柔かい舌をスコップにしてその“スコップ”で口の中の息をぱっとおぼり出して発音する音である。舌は柔かいから、発音された時点で舌はそれる。そのそり舌音も、“有気音”と“無気音”とに分けられるのだが、無気音とは有気音に比べるとそのはく息は相対的に“無”に等しいが、けっして“息が出ない”音ではない。出る息が下向きで弱い、ということである。ch-の息がもっとも強い、r-はその半分ぐらいであり、r-は発音された段階で舌がそれているばかりでなく、ノドとノド彦がちょっと振動する。手の平をカベにしたのをたての線にして示して図形化すると：知zhī→吃chī↗ shī↘ 日rì↗ である。矢印の数は息の強さを示し、上向きの方が下向きの方より強い……。と説明して練習させると意外に正確な発音が出来るようになる。

- I. 我是日本人。
wǒ shì rì běn rén
- II. 你(您)是中国人。
nǐ (nín) shì zhōngguó rén
- III. 他(她)是朝鮮人。
tā (tā) shì chāoxiǎn rén

をくりかえし発音して聞かせ、そして声を出して読ませてそり舌音を練習したらよい。

- I. Wǒ shì Rìběnrén。で3回2種類のそり舌音が出てくる。
- II. Nǐ (Nín) shì Zhōngguó rén。で3回2種類のそり舌音が出てくる。

Ⅲ. Tā (Tā) shì Cháoxiǎngrén. で3回3種類のそり舌音が出てくる。前申した如く、4つあるそり舌のうち、ch- がことの外難しいようである。その次に難しいのがsh- であるようである。それで、そり舌音の重点トレーニングとして、この二つのそり舌音を特にピックアップして練習したらよい。

朝cháo、桥(橋)qiáo：少shǎo、小xiǎo：平く言えば：“朝”は“ツ”からスタートして発音されるもの“ツ→”→ツアオ、“桥”(橋)は“チ”からスタートして発音されるもの“チ→”→チアオ：“少”は“ス”からスタートして発音されるもの“ス→”→スアオ、“小”は“シ”からスタートして発音されるもの“シ→”→“シアオ”…と教えて訓練すれば案外と正確に発音してくれる。

“四声”も日本の学生には難しいようである。とくに、二声と三声の区別が難しいようであるが、“三声+三声→二声+三声、つまり“√+√→/+/√”という声調変化をする。二声と三声是北京人にとっても、隣り同士の近いものでお互いに近い声調でその差異も微妙であるから、外国人である日本人が二声、三声の区別がしにくいのはあたりまえである。

広州語を九声あると分類する学者と六声あると分類する学者もある。それで、私は、北京語は“轻声”を含む“五声”ある言語であるという観点で北京語の声調の研究をして行くことも出来ると思う。

一声：高く平らたく、発音する。

二声：尻上りの調子で発音する。

三声：低い調子で発音する。

四声：尻下りの調子で発音する。

轻声：軽い調子で、さっと発音する。音節の一部しか発音されないか、

その音節全体がほとんど音として出ないでそのところが口形だけである。何か、ひとり言をつぶやいているようである。

例：谢谢！Xiè x□e

你是日本人吗？Nǐ shì Rìběnrén m□？

そり舌音をはっきり発音したり“谢谢！”，とか“这个东西^{dōng xī} 很便^{hěn pián} 宜^{yí}。”とか言う軽声化や“三声+三声→二声+三声”というように声調の変化が発生し、四声をしっかりやることとなったのは、長い年月をかけて形成されたもので、みやびた“京味儿”的なものなのである。zhī, chī, shī と zī, cǐ, sīをはつきり区別し、-n と -n gをはつきり発音することも“京味儿”。北京人は“北京”を“běi jīng”と発音し、“天津”を“tiān jīn”としっかり発音するのに対し、北京からそれほど遠くないことに位する天津っ子は、北京を“bēi jīn”と言ったり“天津”を“tiān jīng”と言ったりする。一方が線のほそい“みやび”を感じさせるのに対して、一方はこまかいことにあまりこだわらない、土くさいが力強さをも感じさせるものがある。

5. 文法について

大学入試まで英文法でいじめ抜かれた日本の学生は、“文法”と聞くと恐れをなす。これを“心有余悸”xīn yǒu yú jì と言う。しかし、言語の骨組という角度から、文法というものを無視して、通過することは出来ない。いろいろな文法書やその方面の論文も読んだが、あまりにも煩瑣でわかり難いように思える。そう言ったもので教えてたのでは、絶対多数の学生が可哀相である。それで簡潔にまとめてみようと思ひた。昨天热。今天热。明天热。でそれぞれ、“きのうは暑かった。”“今日も暑い。”“あすもあついでしょう。”である。日本語で2分ぐらいの話は中国語では1分で足りる。100ページぐらいの日本語は50ページぐらいの中国語で書かれている。それで、文法に関しても簡潔な説明が妥当だと思う。それが中国語にふさわしい。昨日であつちから、“暑かった”。今日のことから“暑い”。明日のことだから“暑いでしょう”、なのである。中国語はファジー的fuzzyなようで物事を的確に表している、そういう言語なので

ある。

①センテンスの構成

I. 主語・形容詞。

今天热。

中文难。

这个办法好。

II. 主語・動詞。

鈴木同学在。

佐藤小姐来。

庆祝大会虽然在下午三点钟才开始，可是不少参加庆祝大会的队伍，从清晨六点钟就从各乡陆续出发了。在通向会场的绵延一二十里的路上，人们从四面八方，从各个角落，漫山盖野地向会场。

III. 主語・名詞。

今天星期五。

昨天阴天。

后天国庆节。

②否定文の構成

I. 主語・不（副詞）形容詞。

今天不热。

中文不难。

这个办法不好。

II. 主語・不（副詞）動詞。

鈴木同学不在。

佐藤小姐不来。

大会不开始。

III. 主語・不是・名詞。

今天不是星期四，是星期五。

昨天不是阴天，是晴天。

后天不是国庆节，是劳动节。

③疑問文の構成

I. 今天热吗？

今天不热吗？

今天热不热（呢）？

中文难吗？

中文不难吗？

这个办法好吗？

这个办法不好吗？

这个办法好不好（呢）？

II. 鈴木同学在吗？

鈴木同学不在吗？

鈴木同学在不在（呢）？

佐藤小姐来吗？

佐藤小姐不来吗？

佐藤小姐来不来（呢）？

大会开始吗？

大会不开始吗？

大会开始不开始（呢）？

III. 今天星期五吗？

今天不是星期五吗？

今天是不是星期五（呢）？

昨天阴天吗？

昨天不是阴天吗？

昨天是不是阴天（呢）？

后天国庆节吗？

后天不是国庆节吗？

后天是不是国庆节（呢）？

④ “了” について

天气热了。 天气热了吗？

天气不热了。 天气不热了吗？

现在就职难了。 现在就职难了吗？

以前吃饭难，现在好了。 听说以前吃饭难，现在好了吗？

鈴木同学不在了（死了）。 鈴木同学不在了吗？

佐藤小姐不来了。 佐藤小姐不来了吗？

⑤ II. “主語・動詞。” についての詳説

1. 鈴木同学在。The moon shines.

2. 我是日本人。He is an Englishman.

3. 我爱你。I love you.

4. 他送我一本书。My uncle sent me this book.

5. 他们叫他“阿Q”。They called him old Ben.

⑥ 我有爱人，没有孩子。有 ↔ 没有（×不有）。

有没有提问（呢）？ etc.

6. おわりに

以上、中国語教育についての私の試みや考えを述べて来た。その願いは、ちゃんと教えたからである。教育というものは、教える側と教わる側とからなっており、この双方がちゃんとしていなければ困る。そういう意味で、教師の側としては、中国語についてよく研究し、教育方法についてこまかい心配りが必要である。そのためには、教師が学生の現在おかれている思想状態についても了解が必要である。学生の側としても、同じ漢字を使った漢字圏文化の言語だとの、カンジで安易な気持ちで中国語をえらんで学ぼうというのではなく、未知の学問として本腰で取組むべきだと私は強調したい。千里の道も一歩から。一歩一歩からちゃんと学んでほしい。出来るだけ遅刻しないこと、欠席をしないこと、居眠りをしないこと。私

語などは、もつての外である。夏目漱石は芥川龍之介や寺田寅彦など多くのすぐれたお弟子さんが居たが、松山の中学や大学の教師としての評判はあまり好ましくなかったようであった。漱石自身、“やめたきは教師、やりたきは創作なり。”とぐちっていた。その漱石先生がある日教室でふと和服を着たある学生がふところ手をして講義を受けているのを目にしてその学生をなじった。実はその学生は片腕をなくしていたので、ちょっと目にはふところ手をしているように見えたのである。そのことに気がついた漱石は、“おれだってない知恵をしぼって講義してんだ、おまえだってない手を出して聞いてくれてもよいではないか。”と言ったという。人にものを教えるというのは難しい学問である。中国語そのものがまだよくわかっていないで、ない知恵をしぼって説明しようとしている時だつてある。そんな時に私語されたり、変な帽子をかぶって居眠りしている学生を見ると冷静さを失ってしまう。“なぜ中国語を学ぶのか”の中で“言語の人気はその国との政治・経済的要因と文化的要因が大きく関係する。”と言った。それが、“就職のため有利だから”というような実利的なものや、“何となく”という同じような文化でしたしみを感じるからと非実利的なものがあるが、いずれも中国と日本の政治・経済的要因と文化的要因というきわめてたよりにならない“認識”に左右された“人気”によっている場合が多い。昨今のような情報の飽食時代、インテリのタマゴであるべきはずの大学生の知的に貪欲でないのには驚かされる。そうした面でのハングリー精神を持ってもらいたい。

漢字とはすばらしい発明である。“木”二つで“林”、“木”三つで“森”になる。漢字はたしかに便利である。一つの文字にそれ相当の概念が込められてある上、象形文字であるからその文字を見ることによって意味が一見了然である。しかし、あまりにも難しい。日本の学生は小学生の頃から苦勞してすでに2000字近くの漢字がわかるようになっている。せっかく努力して2000字近くの象形文字を身につけたのである、あとひとふんばりで2500字程の中国語漢字をマスターするのは、日本の大学生にはさ

ほど難しいことではないのではないかと思う。それに日本の大学生は英語に費やした何分の一かの努力をしてほしい。欧米語に対して厳粛に対しているのに中国語には安直な態度で臨んでいるようである。

発音については、中国語には、日本人にはとても出来そうもないような難しいものが多い。しかし、それは100%正しいものでなくてもよいのではないか？ 55~60%正しい発音をすれば中国人は理解してくれる。中国人である上海の人や広州の人たちも発音の正確度もそのくらいか、それ以下である。中国人は地方ナマリとか発音に対して寛大である。でないと日本の国土の26倍、人口が日本の12倍、漢語以外の言語を使う50以上の民族を擁する中国という国家が成立しないからである。

英語の文法、日本語の文法と比較研究したかぎりでは、中国語の文法は簡潔明確である。ただ、欧米の言語の文法の方式で中国語を解剖すると煩瑣で歯切れの悪いものになっている。それを本来の簡明なものにたちかえって理解させればよいのではないか。すでに述べたように、①センテンスの構成②否定文の構成③疑問文の構成④“了”について……etc.と一步一步積み上げて行けばよい。ふところの深い大地の民はBroken Chineseを受け入れてくれる。

以上述べたすべての点についてすでに優れた論文や著作が発表されているが、私としては別の角度から今後中国語を研究して行きたいと思っている。言語の研究というものは、けっして一人二人…と限られた人たちで探求出来るものではなく、巾広い調査を必要とし、コンピューターによる処理や分析も必要であり、10年20年の時間ではなく、100年200年という時間が必要である。“ことば”というものは生きものであるから、その過去、その現在、その未来をさぐる必要があるであって、過去・未来をさぐることによって現在の言語がよりたしかで美しいものになる。その外、言語というものは近親繁殖というものでは減んでしまうし、活気のないものになってしまう。したがって、中国の少数民族の言葉も含めて、外の多くの言語との比較研究が必要であり、共に発展させて行くべ

きものだと思う。とても一人や数年で出来る仕事ではない。

正しい美しい言語を少しでもいいから確実に学ぶ側に教える。それが教育言語の役目で、それを身につけて自由闊達に言語の荒波に立ち向うことが出来るようになる学生を培う、それが語学教師の義務だと思う。それに、教える側も教わる側も“知行”でなく、“行知”である。そのことは言語に関しても通用する。

参考文献

新華字典 商務印書館

現代漢語詞典 商務印書館

現代漢語語法講話 商務印書館1979 丁声樹 等著

現代漢語 上・下冊 甘肅人民出版社1985 黄伯榮, 廖序東 主編

国語辞典 岩波書店

広辞苑 岩波書店

人民日報

小学語文課本生字表 人民教育出版社

日本大学生為何選修漢語? 郭 潔梅 中国語文1992年第2期